

Title	吉田小五郎著, 「ザヴィエル」
Sub Title	K. Yoshida, Xavier
Author	岩谷, 十二郎(Iwatani, Jujiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1965
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.37, No.4 (1965. 2) ,p.97(461)- 99(463)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19650200-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

吉田小五郎著

昭和三九年吉川弘文館刊

「ザヴィエル」

岩谷 十二郎

フランシスコ・ザヴィエルが日本に初めてキリスト教を伝えた宣教師であることは、本書の著者に従うまでもなく、大袈裟に言えは今日三才の童子も知っていることである。約一世紀に亘るキリシタン時代の礎を築いた人物として、日本文化史上ザヴィエルの名は強調してもし切れぬ程の重みを持つている。

しかしこれ程の人物と承知しておりながら、日本でザヴィエル研究が本格的に行なわれたのは、筆者の知る限りでは一九三〇年代に入つてからのことである。それ以前には浅井虎八郎氏の訳出にかかる「聖フランセスコ・ザベリヨ書翰記」(一八九一年刊)があるだけで、一冊に纏まつたザヴィエル伝は皆無であつた。

本書の著者は三十数年前、我が国では初めてのザヴィエル伝を著し、一九三二年にそれを世に出した(『聖フランシスコ・シャペル小伝』大岡山書店)。その後、比屋根安定氏、幸田成友博士、ヨハネス・ラウレス師の筆になるザヴィエル伝が刊行されたが、著者のこの旧著は日本人の手になるザヴィエル伝として最も高い権威を誇ると共に、引続き多くの人に読まれ、利用されて今

日に至つた。又、著者はこの間にも長短さまざまザヴィエル関係の論文を雑誌に、或は新聞紙上に発表し、ザヴィエルに関する種々の事柄を学界及び世の人に広く紹介してきた。この意味に於て著者は日本に於けるザヴィエル研究の先駆者であると共に、この分野では他の追隨を許さぬ権威と蓄積の豊かさを保つてきたといつてよい。

この度の「ザヴィエル伝」は以上を背景として初めて正当に評価され得るものである。全書版一六二頁の小型本でありながら、そこにはザヴィエルに就いて必要な知識の一切が収められている。ゆるぎない蓄積を持つこの著者にして初めて發揮し得た手法、手際というべきであろう。

内容構成を見つみるに、一、序にかえて、二、少年時代、三、パリ留学、四、イエズス会の創立、五、東洋伝道の召命、六、インドのポルトガル勢力、七、インドの布教、八、伝道の困難、九、アンジローの日本、一〇、鹿児島島の一年、一一、鹿児島から山口へ、一二、京都、一三、山口から府内へ、一四、日本退去、一五、シナ伝道の計画、一六、上川島へ帰天、フランシスコ・ザヴィエルの署名と各国綴字一覧、附録、ザヴィエル上人の遺骸、聖フランシスコ・ザヴィエル家系図、ザヴィエル略年譜、あとがき、聖フランシスコ・ザヴィエル伝道足跡図、となつてゐる。

僅かなページ数にこれだけの章を割振るのには非常な苦心を払つたであろうことは容易にうなづけるが、本書を通読した時、著者のこの苦心は充分に酬いられていると言える。

元来ザヴィエル関係の史料はその殆んどがヨーロッパにあり、従つて彼の名前にもさまざま綴り、読みがあてられているが、著者は先ずこの点に読者の注意を促し、本書で「ザヴィエル」を採るに至つた理由を明示する一方伝記に筆を染める者の態度を穩かな叙述のうちに厳しく打出している。この一事に限らず全篇を通じて著者は極めて具体的な筆致を用い、聖人の一生と、彼を産み出した時代を読者の眼前にくつきりと再現させているのである。

ヨーロッパでは毎年一、二冊必ずどこかで大小のザヴィエル伝が刊行されているが、その大部分は冒頭からこの聖人を偉大な人物と規定し、そこから踏みはずさぬように記述を進めているのが実状である。教会内の人の手になるザヴィエル伝を読む際、特にその感を深くする。

しかし本書ではこの聖人の偉大さもやはり時代の所産の結果として捉えられており、イグナシオ・ロヨラと相識り、イエズス会に入会するまではザヴィエルといえども平凡な貴族の子弟であつたことを著者は明かにし、彼の偉大な天稟は東洋伝道に於て嘗めた苦難の中にこそ見出されるものであることを示唆している。しかし、この偉大な宣教師もインドでは授洗者の数は夥しく挙げ得たものの、質的にはそれ程の成果を挙げたとはいえず、日本伝道に於て初めて彼の真価が発揮されていく。

ザヴィエルは長文の書翰をヨーロッパに送り、日本及び日本人の性格を詳細に報告し、以つて鋭い洞察力と批判力に裏打ちされ

た紹介をヨーロッパ人として初めて行なつたわけであるが、著者はこの見解を更に一步進めて、むしろ西欧へ日本人の目を向けた人物として彼を捉えている。事実、この視点に立つて考察してみると、当時の知識層は彼を眺める際、彼によつて代表される西欧をも同時に眺めていたことは推察に難くない。この点、西欧に対する理解様式の上で、西インド諸地域、アフリカと異り、日本の場合は形而上的連繫が出发点となつていたことは、日本にとつても、又、西欧にとつても幸いであつたといわなければなるまい。

著者は更にザヴィエル以後、約一世紀に近い日本キリシタン史が世界にも類例がない程一糸乱れず真剣な信仰史に終始したのも、ザヴェルの偉大とその後継者たちが例外なく彼を愛し、尊敬し、彼の垂範に応えたからだと述べている。

巻末に附録として著者は「ザヴィエルの遺骸」を添えているが、これはインド、ヨーロッパに於ける聖人に捧げる異常な程の崇敬の念を説明すると共に、嘗て「ザヴィエル日本渡来四百年記念」式典の際、日本人の眼前に顕示された「右腕」をめぐる種々の疑問に卒直な解答を与えるものである。

本文中随所に十数種からの珍しい写真が挿入され、本書の内容を豊かにしているが、数種類を除いて、いずれも今日稀覯本に属する各種の「ザヴィエル伝」から抜萃したもので、総て著者蔵のものばかりである。

近時ヨーロッパではゲオルク・シュールハンマー師の手により最も完璧な「ザヴィエル伝」(G. Schurhammer, Franz Xaver,

sein Leben und seine Zeit.) の編纂が続けられており、一昨年その第二巻が刊行された。いわばそれを「ザヴィエル大辞典」と評すれば、本書は「ザヴィエル小辞典」と評しても差支えなからう。ザヴィエルを学ぶ際の入門書として最適であると共に、キリシタン史の研究者が座右に置いて重宝とすべき価値をも十二分に具えた書である。叙述は極めて平易な筆で行なわれ、心にくい程余裕を保った文章が一気に読者を最後まで引張つていく。先にも記したように、豊かな蓄積がもたらした結果という感を読後に一層深くするのである。

三版発行を機にいわでもの紹介を取っていた。終に臨んで蕪雑な言を連ねたことを著者にお詫びする次第である。

H. G. Richardson and G. O. Sayles,
The Governance of Mediaeval England
from the Conquest to Magna Carta,
(Edinburgh, 1963).

森岡敬一郎

共に有数の中世史家である Richardson 氏と Sayles 教授の共著になる本書は、極めて注目すべき業績である。それは、共著者の一人 Sayles 教授がかつて著した The Mediaeval Foundations of England (London, 1950) が、up-to-date な内容を

もつ、均整の取れた、理想的なイギリス中世史の入門書として、発行以来今日に至るまで、名声を恣にしていることから推察されるのは、全く対蹠的な意味に於いて注目し得る書なのである。The Mediaeval Foundations of England を著すに当たっては、Sayles は、自説とても尚反対論の多いものについては、強く主張することを差控えるまでに、初歩の入門者に、基礎的な成果を、出来るだけ客観的に伝えることに配慮しつつ、自己の視角から整理したものに対して、本書は、学的に一つの目的をもった、徹底的な、或は余りにも徹底的な自己主張の書である。

周知のように、現在に於いても尚、Stubbs と Maitland との中世イギリス国制史に対する影響は大きい。この二人の著書は、共に、かなり急進的な Maitlandians の初期議会について彼等が共同執筆した幾つかの monographs ("The Early Records of the English Parliament," B. I. H. R. v and vi "The Parliaments of Edward III." ibid, vii, "The King's Ministers in Mediaeval Parliaments" E. H. R. xlii and xlvii, (éd). The Rotuli Parliamentorum Anglie Hactenus indediti, 1299-1373, (Camd. Soc. 3rd Serms. li, 1935. etc.) が、専ら中世議会の本質を裁判所と見る Maitland の見解に立って、Stubbs の「政治機関説」の打破を目的とするものであったが、本書はノルマン征服後、ジョン王時代までのイギリス国制研究に現在尚残っている Stubbs 説の無批判な踏襲を逐一史料に基づいて考証し、その誤りを明かし、以って Stubbs の